

「けしき」と「けはひ」

光 川 妙 子

『万葉集』には、「けしき」「けはひ」のどちらの語も見当たらないが、平安朝の資料では次の通りである。

	「けしき」	「けはひ」
竹取物語	五	なし
土左日記	三	なし
蜻蛉日記	二五	一
源氏物語	七八五	三七六
更級日記	一一	二

これを見ると、竹取物語、土左日記には、まだ「けはひ」が使われていない。

「けしき」が目、「けはひ」が耳によってとらえられる様子を表わす、とする実例は、いちいち挙げなくてもいいと思われるくらい多かったが、その反対はほとんど例を見ないかと思っていた。ここに、「けしき」と「けはひ」の特徴を要領よくまとめて書かれている「古文単語の整理法」(金田弘・石井秀夫著、学習研究社刊、昭和三七一年一月二〇日発行)の文章をそのまま引用してみよう。

けしきもけはひもともに「様子」と訳すがけしきが風景や事物、人間の姿や事情を眼前に見て直接そのものからうける感じや様子を表現したものであるのに対してけはひは漠然とした全体的な感じや音とか匂いによってとらえられた事物についての感じや様子

を表現したものである。こういふことから「けしき」には「見る」「見す」といふことが下にづくが「けはひ」にはつかない。一方「けはひ」には「聞く」といふことが下にづくが「けしき」にはつかない。(二五五頁)

右のように簡潔に述べられているが、「けしき」には「聴覚」による例もあるので、それを指摘してみたい。

とばかりありて、おほつかなうおんふことにやあらんとて、いささか咳しほぎのけしきしたるにつけて、「時しもあれ、あしかりけるおりにさぶらひあひはべりて」といふをはじめにて、おもひはじめるよりのこと、いと多かり。(蜻蛉日記、三〇三頁一三行)

(日本古典文学大系による。)

さきくも聞き知る声なりければ、こわづくり気色とりて御消息聞ゆ。若やかなるけしきどもあまたして、おほめくなるべし。

(同、花散里、四四六頁二二行)けしきけはひ(河内本系統河内本)(対校源氏物語新釈)による。以下同じ。)

次の二例は「聞く」といふことがはっきりと出ている。

御籬の内のけはひ、そこらつどひ給ふ人の衣の音なひ、しめやかに振舞ひなして、うちみじろきつつ、悲しげさの慰めがたげに漏

り聞ゆる気色、ことわりにいみじく聞き給ふ。(同、賢木、四二八頁五行)

三日の夜の御消息ども聞えかはし給ひける気色を伝へ聞き給ひてなむ、このおとどの君の御心を、あはれに忝くありがたしと思ひ聞え給ひける。(同、真木柱、一七六頁一三行)

次に、「けはひ」が視覚にもとづいている例を示してみよう。

夏の御すまひを見給へば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わざと好ましき事もなく、あてやかに住みなし給へるけはひ見えわたる。(同、初音、四頁四行)

人さまのわららかにけぢかく物し給へば、いたくまめだちたる心地し給へど、なほをかしく愛敬づきたるけはひのみ見え給へば、兵部卿の宮などは、まめやかに責め聞え給ふ。(同、螢、四六頁四行)

物の色いと清らにて、殊更にやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり。(同、葵、三三八頁一一行)

いとどつつましけれど、はし近うながめ給ひけるさまながら、のどかにて物し給ふけはひ、いと目やすし。(同、澤漂、一二三頁一一行)

御門引き入るるより、けはひ殊に広々として、まかで参る車多くまよふ。(同、玉鬘、三八五頁一四行)

ここに挙げた例はほんのわずかであるが、筆者の調べた「けはひ」に、聴覚によるものより、視覚によるものの方が多いのは意外であった。筆者が調べたところでは、視覚によるものと、聴覚によるものとの比は、八対三であった。

また、視覚、聴覚によるもの以外に、「けしき」には見られない、触覚によるものがあつたのでそれを一例挙げてみよう。

手さぐりのほそくちひさき程、髪の毛と長からざりしけはひのさま、似通ひたるも、思ひなしにや、あはれなり。(同、空蟬、九三頁五行)

「けはひ」の下に「見る」の語がついている例が『源氏物語』若菜上までに十四例もあり、「けしき」に「聞く」の語がついているものは二例あつた。これで、両者のはっきりした区別ができにくくなった。さて、「けしき」と「けはひ」の語源的な相違はどうなのであるか、見ていこう。

「けしき」

「けしき」は「気色」と書く。それで『漢字語源辞典』をひくと「気」は「ケ」が呉音、「キ」が漢音であり、「色」のところには、「顔かほ気かほなり。人十日の会意」とあつた。だから「顔色」という意味は「色」からきたことになる。『大言海』では、け志き志し（名）気色

「けはひニ気色ノ字ヲ充テテ気色ト読ム語」(イ)ケハヒ。キザシ。
ミエ。アリサマ。ヤウス。(ロ)顔ノケハヒ。カホイロ。(ハ)心ノケハ
ヒ。気色。機嫌。(好キニモ、悪シキニモ云フ)(ニ)ココロモチ。
意中。とある。

以上のことから、「気色」は漢語である、ということが出来る。
そして「気色」の意味の「顔色」「機嫌」というのは「気色」の「
色」からきていることがわかる。

「けはひ」

『大言海』を見ると、けはひ(名)気色「けハ、気ナリ、はひ
ハ、業ハひ、過ハひノはひニ同ジク、事ノ、広ガルヲ云フ語ナリ」
ミエ。気色。ソブリ。ケブリ。ケブラヒ。容子。とあり、『角川漢
和中辞典』で「気配」を見ると、「キハイ」「ケハイ」の読み方はど
ちらも、わが国のことばになつていた。

つまり、「気配」は漢語ではなく、大和ことばなのである。

ここで、「けしき」と「けはひ」は、意味の上で対立しているも
語源的に調べて見ると対立していないことがわかる。

また、形の上で違う点も認められる。「けしき」には、「気色だ
つ」「気色付く」「気色取る」「気色吹く」というような複合動詞が
認められるけれど、「けはひ」にはそれがない。

視覚による「けはひ」と「けしき」の違いでは、まず「けしき」
は、はっきりと目で見た様子、明らかにそれとわかる具体的現象の
場合に使われる。「けしき」で表わされた範囲は、わりと限定され
ていて、まわりを考えなくてもすむ部分的要素をもっているといえ
る。『源氏物語』では、「事情」「心ざし(意中)」としても使われ、

表面上の様子や有様ばかりでなく、心の中、心の向き方まで表わそ
うとしている。これに対して、「けはひ」の目で見た様子は、多く
人柄に接していて、その人柄全体の様子とか、気品、奥ゆかしさ上
品さ、物静かさなどを表わし、またその場全体の雰囲気を表わす。
そして、比較的広い範囲の様子や状態をながく見せている場合に使
われている。このように、深く追究していくと、意外なことが発見
できて、非常に興味深い。

(昭和四五・一初稿、昭和四六・五再稿)

〔付記〕

右は、四百字詰原稿用紙百十二枚にわたる卒業論文の一部であ
る。

〔評〕

北山谿太氏著「源氏物語辞典」の「けしき」の第二項に「音声」
として、一つの例をあげ、次のような注を付している。「若やかな
る気色(声トイフ意)どもあまたして、おほめくなるべし。」(こ
の例は小稿にも引いているので、ついで見られたい。)このように
「けしき」も聴覚と関係していることに少しふれている。従って、
特に新しく指摘したのではないけれど、焦点をしばって詳しく述
べている点が、小稿の特徴である。述べるに当たっては、異文関係
についてふれてはしなかった。調査の厳密さと記述のたしかさにも一
考を要するところがある。取り上げた範囲は、冒頭の五つの作品で
あり、そのうち源氏物語の場合は若菜上までであるので、今後の発
展を期待する。

(井上親雄)